

相談室だより 2011年10月

猛暑も過ぎ去り過ごしやすい季節になってきました。朝晩の気温変化が激しいですが体調管理には十分に気をつけて秋を謳歌したいと考えている今日この頃です。今回の相談室だよりでは先日開催された【九州沖縄地協 SW 研修交流集会】について報告したいと思います。

10月8日から9日にかけて九州沖縄地協 SW 研修交流集会に参加してきました。これは私達が所属する民主医療機関連合会という全国組織の九州沖縄ブロックに所属する SW が一同に会して、日常の活動や経験を報告し、普段顔をあわせる機会の少ない同職種の交流を深めることを目的として2年に1回開催されているものです。今回は「憲法9条と25条について考える」ことをテーマに沖縄で開催されました。九州各県から総勢30名ほどが参加しました。

研修は沖縄の史跡の一つである「系数アブチラガマ」を訪ねることから始まりました。総勢30名のSWを乗せた観光バスは沖縄の玄関口である那覇空港から南へ40分ほど行った玉城村(たまぐすくそん)にある南部



総合観光案内センターに到着しました。辺りには普通の民家が立ち並んでいて付近に史跡があるような雰囲気は全くありません。案内センターから少し離れたところにアブチラガマに関する案内板があり、その脇にひっそりとガマの入り口が私達を待っていました。ガマは全長270m程の自然洞穴で、戦時中はいわゆる防空壕

としても使用されていましたが、沖縄での地上戦が激化した後は南風原(はえばる)陸軍病院の分室として使用されることとなりました。入り口は非常に狭く、急な階段を下って行かなければいけません。ガマ内部は真っ暗で、案内センターで渡された懐中電気を使用しなければ全く何も見えません。また天井も低くヘルメットを着用していなければ恐らくケガをしていたでしょう。現地の方の案内を受けながら、かつての重症者収容場所や軍医室、病棟や生活区をみて回りま

した。案内者の提案で一斉に懐中電気を消しましたがあたりは暗闇に包まれてしまいました。当時は照明設備もなく、ろうそくの灯りだけが唯一の光源だったそうです。頭上に響く空爆や艦砲射撃の音、ガマ内部に充満する死臭や汚物臭、戦傷者のうめき声など正常な精神状態ではとても耐えられない状況だったろうと思います。そのままガマ内部を進み、出口から自然の風と太陽の光を感じた時、大きく安堵しました。1時間程度の体験でしたが、平和であることの大切さを感じしみと噛みしめる事ができました。

系数アブチラガマを後にしたSW一行は一路糸満市摩文仁にある平和祈念資料館へ向かいました。資料館に入る前に「平和の礎(いしじ)」について説明を受けました。ここでは沖縄戦でなくなられた方々の氏名を国別、都道府県別に刻銘されているのだそうです。現在は24万人を超える方が刻銘されているそうですが、



約9割にあたる22万人超が日本人で、さらにその半数を超える14万人が沖縄県民ということでした。この戦争において沖縄県民が受けた被害の大きさをまざまざと感じさせられました。

その後記念資料館の常設展示室を散策しました。展示物は第1室(沖縄戦への道)に始まり、第2室(住民の見た沖縄戦『鉄の暴風』)、第3室(住民の見た沖縄戦『地獄の戦場』)、第4室(住民の見た沖縄戦『証言』)、第5室(太平洋の要石)と5つのブロックに分けて構成されていました。第1室では古くは琉球王国の歴史に始まり、島津による侵攻や皇民化政策などの歴史が綴られていました。第2室から第3室では日本で唯一の地上戦となった沖縄戦の様子が写真や遺留品を中心に展示されていました。随所に映像も用いられており、上映されている映像の悲惨さはまさにこの世の地獄であると思いました。第4室では戦後に収集さ

れた証言が冊子にして展示され、それぞれが体験された戦争がそれぞれの言葉で語られていました。お墓の中に隠れていた方の体験談を読んだ時、昔教科書で見たお墓に隠れて震えている子供の姿が頭に浮かんできました。教科書では分かりませんでした。証言集ではお墓の中には腐敗したご遺体が安置されていたところもあったようです。また小さい子供などが泣き出すと隠れていることがばれてしまうので日本兵に殺されたという方もおられました。現在では想像もできないようなことが実際に起こっていたという現実非常に大きな衝撃を受けました。証言集を読みふけている間に時間が来てしまい、最後まで資料館をまわることができませんでしたが、改めて沖縄に行く機会を持って資料館へ行ってみようと思います。

研修2日目は、命と平和の語り部「石川・宮森630会」の豊濱光輝先生に講演を頂きました。豊濱先生には米軍ジェット戦闘機墜落事件を中心として、戦後の沖縄を取り巻く現状及び問題点について戦争を体験されたまさに当事者としての立場から熱く語って頂きました。事件の概要は下記のとおりです。

1959年6月30日に米軍ジェット戦闘機が石川市(現在のうるま市)に墜落、民家を押しつぶしながら宮森小学校に突き刺さり炎上するという前代未聞の事件が起きました。この事件では住民6人と小学生11人の尊い命が失われる事となりました。逃げ惑う子供たちやその家族を含め野次馬もたくさん出て周囲は騒然となったそうですが、すぐに米軍によって封鎖されてしまったということでした。

「沖縄に戦後はない」と豊濱先生は言われます。この事件も本来は日本の主権を主張して調査などできたと思われるのですが、軍事機密が漏れることを危惧した米軍は地位協定を盾に周囲を封鎖し、既に撮影されていた写真のネガ等を全て没収してしまったそうです。このため実際の現場写真は数少なく、遺族や関係者は嘆き悲しみ事故について多くを語ることなく過ごされ



小学校に設置されている平和の鐘

ていたため、事件の真相や当時の様子などはほとんど忘れられかけていました。そんな中、事故から50年の節目にこの事件を風化させてはならないとしてご遺族や当時の教職員及び同級生に呼びかけ「石川・宮森630館」設置委員会が設立されました。会の積極的な関わりや事件を過去のものにしてはならないという思いから、ご遺族や関係者から多くの証言や資料が集められました。これらは「沖縄の空の下」「沖縄の空の下」と2冊の証言集にまとめられています。また講演の中で豊濱先生は「我々は被害者であると同時に加害者であることも忘れてはならない」とおっしゃられたことが印象的でした。



小学校に設置されているなかよし地蔵

【研修・交流集会を終えて思うこと】

研修を振り返ってみて、日頃、沖縄における米軍問題(基地問題や犯罪など)を耳にする機会はあるけれども、実際問題として自分たちにはあまり関係ないという意識があったのではないかと思います。日常的に平和であることのありがたさを考える機会はなく、実際に戦争を体験された方々は非常に高齢となっておられるため、このような体験を出来る機会はどんどん少なくなっています。私たち「戦争を知らない世代」は同じ過ちを繰り返さないためにも、目をそらしたくなるような、そして隠匿しておきたいような過去ですが、正しい歴史を後世に伝えていく義務があると思います。また平和であることの素晴らしさを当たり前的事として受け止めるのではなく、平和を維持するために何ができるのかを考えていく必要があると思います。これからの時代を背負っていく子供たち、そしてこれから生まれてくる新しい生命にも争いのない平和な社会を引き継いでいけるよう、今自分にできることを改めて考えてみたいと思います。

最後になりましたが、この研修交流集会を成功させるためにご尽力いただいた、沖縄県連医療社会部会の方々に感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。